



## 日経産業新聞掲載記事(10月23日版13面)

### 談話室



京二 井口さん

▽:「中国製の工具を扱っているというだけで注目してもらえたが、これからは違う」と話すのは機械工具の専門商社、京二(東京・千代田)の井口勝督会長。リーマン・ショック後には価格の安さから販売が伸びて売上げは2億円を超えた

### 品質のばらつき減らす

が、最近では中国製工具を扱う商社も増え、価格面では競争力を保てないという。▽:このため、9月に

は大手工具メーカーでは品質保証部門の経験がある人材を顧問として採用し、品質管理を徹底する方針を打ち出した。「これからは中国製工具の品質のばらつきを減らす必要がある」としており、取引先の中国メーカーの生産ラインの視察や国内でのクレーム分析にも力を入れる考えだ。

## 日工販SE講座を受講して

南関東営業所 アシスタントマネージャー  
熊谷 康之

日工販では工作機械等の設備機械販売に携わる者を対象としたセールスエンジニア養成講座を毎年開催している。今回は京二から5名の社員が参加して、SE資格を取得した。

その講座において、工作機械の観点から世界の産業を見る『切削加工機械の動向』が最も印象的だった。工作機械の生産と消費は、各国の産業基盤と生産方式、経済状況によって異なり、現在は中国が生産も消費も桁違いに多く世界トップだ。ここ最近では、さらに汎用・NC汎用機の生産が盛んになってきたが、まだ技術不足のため日本や韓国からの輸入部品も多い。また軍用にも使える高性能機は輸入できないため、複合・5軸加工機の開発に躍起になっている。日本の工作機械の世界シェアが30%もあることは嬉しかったが、内需が限界のため海外生産にシフトされる現状は時代を反映していた。

欧州の工場では工作機械は一人一台持ちの為、加工単価を下げるには高生産機械を導入し、米国は7日間24時間だが昼夜同じ賃金なので稼働率は基本100%だ。対する日本は世界で一番賃金水準が高く、世界で一番稼働時間が短い。このあたりが海外生産移管と関係しているのだろう。

米国は工作機械産業が壊滅状態のため輸入が増えたが、航空機や医療、エネルギー産業などで使う国内工作機械メーカーは今も世界トップの技術を持っている。生産物も人もすべてが巨大なこの国は高剛性・重切削タイプの人気が高く、組立てのボルトもM10～12を使う所は大国らしくて面白かった。

今もその産業に合った工作機械が開発されており、その技術の発展は産業が抱える問題解決の助けになると感じた。